

「木造耐力壁ジャパンカップ」20回大会で一区切り

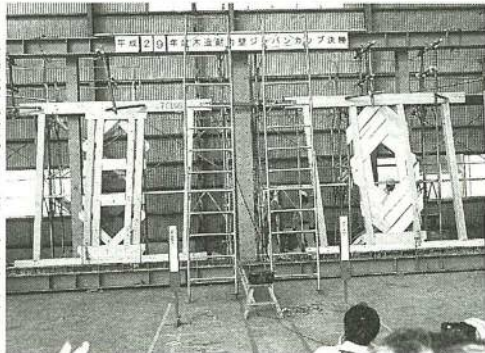
総合優勝はチーム匠

トーナメント優勝はポラス暮し科学研究所

第20回「木造耐力壁ジャパンカップ」(主催NPO法人木の建築フォーラム・木造耐力壁ジャパンカップ実行委員会)が16、18日の3日間にわたり日本建築専門学校で開かれた。トーナメント決勝はポラス暮し科学研究所の「SHINMEI」と指定応力団網中組(東京木場製材協同組合+シネジック+東京大学木質材料研究室)の「メケメケ」という去年と同じ顔ぶれとなり、ポラス暮し科学研究所が勝利。総合優勝はチーム匠(アキュラグループ+東京大学木質材料研究室+篠原商店)の「細〜フアイナル」が獲得した。

木造耐力壁ジャパンカップは今回で20回目とからチーム匠の一員に当たる。運営側の負担が大きいことから、今回は「大会を通じて耐力壁の研究をし一般住宅

で5P(4550mm)を普通に飛ばせるようになった。中大規模木造でも時間は掛かるが技術を生かせるように取り組んでいきたい」と話した。チーム匠は「材料調達は篠原商店。金物、集成材、合板を使うが、国産のムク材にこだわった」(稲山正弘東京大学教授)と細〜フアイナルに懸ける思いを話した。トーナメント戦では準決勝でSHINMEIに敗れたが、総合評価1万7225点で総合優勝とデザイン賞を受賞した。



決勝戦。左がポラス暮し科学研究所、右は指定応力団網中組

ポラスグループからはポラス暮し科学研究所に加え、ポラス建築技術訓練校の「グレコ」とポラスハウジングの「わでいん」の3体が参加。ポラス建築技術訓練校とポラスハウジングの同門対決ではわでいんが勝ったが、解体時間の短さでグレコが環境部門賞を受賞した。トーナメント優勝を果たしたポラス暮し科学研究所のSHINMEIは、設計担当が上廣太取締役から大浦和香子生産プロデューサーSG主任に交代。これまでは金物を30mm使うとか、ウリン、イペの使用など奇抜なことをやってきた。普通のことをきちんとしてやること。17回参加し、8回トーナメントで優勝したノウハウを生かし、桁に柱を少し食い込ませる

など細かな工夫の積み重ねで勝った」と上廣氏がこれまでの大会を振り返った。昨年、決勝戦を戦った網中組は、桧45mm厚×210mmの板を斜めにはめ込んだ。「デザインを重視し、せつかくの学生チームなのでチャレンジした」と網中組の網中勝氏(東京木場製材)。網中組は審査員特別賞を受賞した。近年の大会では長び

た。ビスメーカーのシネジックWithKMCの「伊達なビス絵巻」はシラカバ合板が破壊して敗退したものの、長ビス(パネリードX)を使った耐力壁の解体の良さに会場からは歓声が上がった。

来年以降の開催については、「スタッフも一新して新生ジャパンカップを続けていきたい」と稲山教授が締めくくった。